

ヒンディー語のいわゆる名詞句について

— 属格後置詞 ‘kā’ を中心に —

西 岡 美 樹

要 旨

本稿は、ヒンディー語の名詞句を取り上げ、その中の日本語の格助詞「の」に相当するヒンディー語の属格後置詞 ‘kā’ についての用法を分析し、その二重機能性を日本語の「の」と対照しながら明らかにするものである。

1. はじめに
2. ヒンディー語における名詞句の諸類型
 - A. 名詞 + 名詞
 - B. 名詞+属格後置詞/属格代名詞 + 名詞
 - C. 形容詞 + 名詞
 - D. 分詞 + 名詞
 - E. 名詞 + ‘vālā’ + 名詞
 - F. 斜格名詞句 + 名詞
 - G. 関係詞節
 - H. 同格詞節
3. 属格後置詞を伴う名詞句の構造と分析
 - (1) 名詞+属格後置詞/属格代名詞 + 普通名詞
 - (2) 名詞+属格後置詞/属格代名詞 + 動詞派生名詞
 - (3) 名詞+属格後置詞/属格代名詞 + 斜格名詞句 + 動詞派生名詞
 - (4) 斜格名詞句 + 属格後置詞 + 名詞
 - (5) 動詞的名詞（不定詞）+ 属格後置詞 + 名詞
 - (6) 独立属格
4. 属格後置詞 ‘kā’ の担う文法機能
5. おわりに

キーワード：ヒンディー語，名詞句，属格後置詞，二重機能性，kā

1. は じ め に

ヒンディー語は日本語を母語とする者には簡単といわれる。というのは、基本的な語順、つまり主語、目的語、動詞（述語となる名詞・形容詞を含む）が同じだからである。しかし、これはあくまで単文レベルの話であって、複文になると既存のインド・ヨーロッパのことばに似た部分が顕著になる。

名詞句もしかりで、日本語であれば、名詞の場合、格助詞「の」を使い（複合語化したものはさておき）、形容詞は、直接修飾（名詞出自のいわゆる「一な」形容詞も含む）、そして動詞

は連体形で、全て前からの修飾となるが、一方のヒンディー語には、そもそも統語上、修飾部が前から名詞を修飾するタイプと後ろから修飾するタイプの二つが共存している。

その名詞句の中の一つとして、日本語の格助詞「の」に相当する属格後置詞 ‘kā’ がある。用法も日本語のそれによく似てはいるものの、もちろん違うところもある。日本語の格助詞「の」には、体言とのさまざまな関わりを表すもの、主格を表すもの、目的格もしくは対格を表すもの、または準体助詞としての用法など（『広辞苑第四版』）があるが、その中の体言との関わりを表すもののうち、同格を表す「の」、つまり「首相の〇〇さん」のように「の」が「～である」を表すものに、ヒンディー語の属格後置詞 ‘kā’ は使えない。ヒンディー語は、この場合、英語に似ており「首相」という名詞と「〇〇さん」という固有名詞を並列させるだけである。つまり、ヒンディー語の属格後置詞 ‘kā’ には「～である」という同格を表す機能がないということになる。

この他、広辞苑には、体言との関わりを表すものとして、所有（「～のものである／～が持っている」）、所在（「～にある／いる／おける」）、所属（「～属している」）、材料（「～でできた」）などなど、いろいろな関わり方が挙げられている。その中には、ヒンディー語の属格後置詞 ‘kā’ とまったく同じ用法のもの、ほぼ似たようなもの、まったく違うものがある。日本語に似ている点はともかく、違った点を明らかにすることは、日本語を母語とする者にとって、ヒンディー語の言語運用能力を高めることにつながる。

本稿の目的は、外国語としてヒンディー語を学ぶ際の言語運用能力を高めるための一助とすべく、ヒンディー語のいわゆる名詞句と呼ばれるもの、すなわち、形容詞、動詞がそれぞれを修飾部として使用される場合も含め、ヒンディー語の名詞句全体を概観し、その中でも、広く使用される属格後置詞 ‘kā’ を伴った名詞句について詳しく分析し、その用法を明らかにすることである。

なお、個々の例については、作例及び、引用文献（論文末参照）より引用したものが混在しているが、煩雑になるので、各々明記することは避けた。

2. ヒンディー語における名詞句の諸類型

先にも述べたとおり、日本語と同じO V言語といわれるヒンディー語だが、名詞句を形成する場合、大きく分けて二通りの統語構造を取る。主要部（Head、以後「ヘッド」と呼ぶ）が修飾部（Modifier、以後「修飾部」と呼ぶ）の前に置かれるものと、その逆の、ヘッドが修飾部の後に置かれるものの二つである。本稿では、それぞれの名詞句を以下のとおり、前置修飾型、後置修飾型と呼ぶことにする。

前置修飾型	:	Modifier	Head
後置修飾型	:	Head	Modifier

以下でヒンディー語の名詞句パターンを例示していくが、そのうちAからFまでが前置修飾型、残りのGとHが後置修飾型となる。修飾部となる要素には、名詞、形容詞、そして動詞がある。前置修飾型の場合、名詞は往々にしてジョイントとなる属格後置詞 ‘kā’ を伴うことになる。Cの形容詞は元来が名詞にかかるものなので問題はないが、動詞については、日本語の連体形にも似た機能をもつ動詞の未完了分詞、完了分詞が形容詞的な働きをもち、名詞にかかることができる。この時、どの要素も漏れなくヘッドの名詞と性・数の一致を起こす。

このように日本語のような前置修飾型の名詞句があるのと同時に、ヒンディー語には後置修飾型の名詞句も存在する。といっても、フランス語などのロマンス諸語のように形容詞が後置されるわけではなく、修飾部である定形節をヘッド名詞の後に置き、修飾させるものである。Gの関係詞節、Hの同格接続詞節がそれに当たる。

実際、日本語に馴染み深いのは前置修飾型の方だが、日本語にも後置修飾型の名詞句もないわけではない。たとえば、「ほら、あの子、昨日ここに来た、あの子、近所に住んでるんだって。」の「あの子、昨日ここに来た」は、ヘッドが前、定形節である修飾部が後にきて、後置修飾型の統語構造を取っている。もっとも、日本語のこのパターンは、会話のような自然言語に見られるものであって、書き言葉ではほとんど見られない。

では、以下でヒンディー語に観察される名詞句の類型を概観していこう。

A. 名詞 + 名詞

ここでは名詞と名詞がおおよそひとつの名詞と化したものを挙げる。基本的に語を分かち書きするヒンディー語だが、分かち書きによる一語彙化はほとんどなく、ハイフンで名詞と名詞をつなげるか、分かち書きをせず完全に一語彙化させるかが主流である。なお、実際、正書法の定まらないヒンディー語¹⁾では、どれが正しいと言い切ることができない。例は以下のとおりである。

【分かち書き型】

sattū yajña 「サットゥー供儀」

【ハイフン型】

hiraṇyākṣ-vadh 「ヒラニヤークシャ退治」

rukmiṇī-haraṇ 「ルクミニ略奪」

sāgar-maṁthan 「乳海攪拌」

niyam-bhaṅg 「掟破り」

khān-pān 「飲食」

【一語化型】

niyambhaṅg 「掟破り」

yagyakuṇḍ 「祭式用の炉」

dhūmrpān 「喫煙」

このタイプで分かち書きをするものは、ハイフン型に比べると圧倒的に少なく、筆者の知る限り、上に挙げた一例だけである。上の例の中にある「掟破り」は、‘niyam-bhaṅg’ と ‘niyambhaṅg’ のようにハイフン型と一語型の二通りが同じ話の中で観察されている²⁾。これは筆者の恣意的な選択に基づいているものといえよう。

また、khān-pān 「飲食」は ‘khān’ 「食」 ‘pān’ 「飲」 から構成されているが、一語化型に挙げた dhūmrpān 「喫煙」は、 ‘dhūmr’ 「煙」 ‘pān’ 「飲」 で構成されている。ただし、前者が一語化されない理由は、エコー・ワード（同じ調子の語を重ねるもの）として取り扱われているためだと考えられる。対する後者は、一語化された複合語となっている。どちらもサンスクリット出自の語で、連声 (saṃdhī) にしたがって、造語された類のものである。

B. 名詞＋属格後置詞／属格代名詞 ＋ 名詞

本稿の主題となる部分なので、ここでの例示は若干にとどめ、詳細は後述することにする。例としては、‘āp’ 「あなた」と ‘ghar’ 「家」を属格代名詞で結び、‘āp kā ghar’ 「あなたの家」、また、‘merā’ 「私の」と ‘dost’ 「友達」で ‘merā dost’ 「私の友達」となる類のものである。ちなみに、ヒンディー語では、人称代名詞のすべてがこのような屈折型の属格形をもっているわけではない。三人称単数・複数、および二人称の複数形として比較的新しく加わった ‘āp’ のみである。詳しくは3章を見られたい。

C. 形容詞 ＋ 名詞

ヒンディー語における形容詞と名詞の組み合わせのものは、日本語と同じく形容詞は名詞に先行する。‘baṛā’ 「大きい」と ‘makān’ 「建物」で、‘baṛā makān’ 「大きい建物」となる。形容詞は ‘-ā’ 語尾のものだけが、ヘッドの名詞の性・数を受けて語尾変化する。他の語尾の形容詞は変化しない。

D. 分詞 ＋ 名詞

この組み合わせは、動詞の非定形である分詞が名詞を修飾するものである。まずは未完了分

詞を使ったものを見てみよう。

bahtī (huī) nadī
 流れる—未完了 コー完了 河
 reḍiyo suntā (huā) ādmī
 ラジオ 聴く—未完了 コー完了 人

この構造は、日本語の動詞の連体形が名詞の前から修飾するものに当たる。それぞれ修飾部が、ヘッドである名詞の性・数・格により形容詞変化する。上は自動詞を使った「流れる／流れている河」、下は他動詞を使った「ラジオを聴いている人」である。

また、この二つのどちらにも見られるコピュラ動詞の完了形は、非定形節となった従属文のコピュラ動詞の痕跡であり、完了形を取ることで「非定形節の状態にある」という意味を示す。本来、分詞自体に形容詞的性格があるので省略可能ではあるが、文レベルのものが修飾する場合はほとんど省略されることはない。

これらの名詞句は、後置修飾型の関係詞を使って以下の通り言い換えることが可能である。

(vah) nadī jo bahtī hai
 あの 河 関代 話す—未完了 コー現在
 (vah) ādmī jo reḍiyo suntā hai
 あの 人 関代 ラジオ 聴く—未完了 コー現在

カッコ書きの‘vah’は元々指示代名詞「あの」に当たるのだが、ここでは関係代名詞と呼応する相関辞として使われており、しばしば省略される。詳しくはGの関係詞節のところ述べる。

次に完了分詞が名詞を修飾するものを挙げる。

marā huā mṛg
 死ぬ—完了 コー完了 鹿
 merā likhā huā patr
 私の 書く—完了 コー完了 手紙

上は自動詞を使った「死んだ／死んでいる鹿」で、下は他動詞を使った「私の書いた手紙」である。他動詞でかつヘッド名詞に目的語がくる場合、主語は属格後置詞‘kā’もしくは属格の人称代名詞で表す。日本語の場合、「私の書いた手紙」でも「私が書いた手紙」でもどちら

でもよいが、ヒンディー語は、この場合、属格である。

また、これらも先ほどと同じように関係詞節で言い換えることができる。

(vah) mṛg jo marā hai
 あの 鹿 関代 死ぬー完了 コー現在
 (vah) patr jo maimne likhā hai
 あの 手紙 関代 私+能 書くー完了 コー現在

なお、ヒンディー語の場合、この分詞による前置修飾が可能なのは、元々文の主語もしくは目的語³⁾がヘッドになる時に限られる。こちらも詳しくはGの関係詞節を参照されたい。

最後にヘッドが斜格名詞になった稀なものを挙げよう。

bhārat jāte samay
 インド 行くー未完了 時・斜

これは、「インドへ行く時(に)」という意味で、日本語の「～する時(に)」とまったく同じである。ただ、日本語と少し違うのは、主語を補う場合は、たとえば一人称・単数ならば、属格代名詞の斜格形‘mere’をこの句の先頭に置き、「私の行く時」のようにする。日本語のように主語の形を使って「私が行く時」とはできない。あくまでこれが名詞句だからである。

ところで、ヒンディー語のこの構造は、本来、主語または目的語に限られるはずなのだが、このヘッド名詞「時」は文の要素である主語にも目的語にもなっていない。それは、関係詞節を使って言い換えれば一目瞭然である。

jis samay maim bhārat jāūṅgā
 関代・斜 時 私 インド 行くー未来

これは上の主語、目的語のところで挙げた相関辞の位置に関係代名詞‘jo’の斜格形が出てきているパターン⁴⁾のものである。名詞「時」が斜格名詞になっているため(もっとも見た目は変わらないが)、「jo」から‘jis’に変化しているのである。

E. 名詞 + ‘vālā’ + 名詞

この‘vālā’は、多分に属格後置詞‘kā’に似た側面があるが、この他に、日本語の準体助詞「の」によく似た機能ももつ。まず以下に例を挙げてみよう。

ṭopī vālā ādmī

帽子 接辞 人

ṭopī vālā

帽子 接辞

上は「帽子の人」、下は「(あの) 帽子の」になり、人が複数いる中で外見の特徴を定める時に使用する。ここでいわゆる日本語の「帽子の人」を言う時、属格後置詞‘kā’を使用して‘ṭopī kā ādmī’ とすることはできない。ただし、ものによっては属格後置詞とこの‘vālā’の置き換えは可能である。たとえば、‘chat kī bāt’ と ‘chat vālī bāt’ (‘vālī’ はヘッド名詞‘bāt’に対応した女性・単数形)のように、前者は「屋根の話」=「屋根に関する話」になるが、後者は、前者と同じ「屋根の話」もしくは「屋根に関する話」の他、「屋根の上でした話／屋根での話」の意味をもたせることができる [Jagannāthan: 321]。この場合は文脈により判断されることになるが、つまり、述語動詞で表す部分をあいまいにし、意味的な幅をもたせることができるのである。

また、この接辞‘vālā’は動詞の不定詞にも付くことができる。その用法に関してはまだはっきりと説明されておらず、大変興味深い接辞ではあるが、ここでは‘vālā’そのものが議論の対象ではないので、これ以上の説明と議論には踏み込まない。

F. 斜格名詞句 + 名詞

ここで挙げる斜格名詞句とは、本来の名詞に後置詞が付く時の名詞の形態、すなわち斜格形からなる名詞句のことである。以下に例を挙げる。

dharmrāj ko śāp : ダルマラージへの呪い

kirāt se yuddh : キラートとの戦い

śok meṃ harṣ : 悲しみの中の喜び

kāl par vijay : 死の克服

ここで挙げた例はすべて物語の題名だが、このように題名や見出しには斜格名詞句がそのまま形容詞的にヘッドの名詞にかかることができる。日本語では「豚に真珠」、「棚から牡丹餅」のような古い格言によく見られる構造だが、現代の一般的な見出しには、たとえば「インドからの手紙」のように格助詞「の」が挿入されることの方が多い。実際、ここで挙げた例でも「キラートと戦い」では、見出し用の名詞句として完結しない、日本語の場合いかにも非定形節の一部のように見えてしまうからである。つまり、日本語の斜格名詞句には形容詞的な修飾機能がないことになる。もちろん先にも触れたように、ヒンディー語も日本語のそれとほぼ同

じで、見出しや慣用表現にはよく見られるパターンであるが、通常の文の中でこのような形容詞的に使用したものはない。たとえば「インドからの手紙」を ‘bhārat se patr’ 「インドから手紙」とか、属格後置詞「の」を用いて ‘*bhārat se kā patr’ 「インドからの手紙」ということは、ヒンディー語ではないのである⁵⁾。

G. 関係詞節

先に述べたとおり、この関係詞節は後置修飾型の代表的なものである。相関関係のあるDのところでも少し述べたが、ここで改めてその関係詞節を観察してみよう。

(vah) kitāb jo mez par paṛī hai
 あの 本 関代 机 上に 横たわる—完了 コー現在

(vah) khānā jo merī mām̃ banātī hai
 あの 食べもの 関代 私の 母 作る—未完了 コー現在

[別形]

jo kitāb mez par paṛī hai
 関代 本 机 上に 横たわる—完了 コー現在

一番目、二番目の関係代名詞による名詞修飾構造はインド・ヨーロッパ語族の言語によくみられる、定形節が後から修飾する名詞修飾構造である。しかし、ヒンディー語は現存のインド・ヨーロッパ語族の言語と少々違っており、関係代名詞に呼応する相関辞 ‘vah’ (本来は指示代名詞「あれ／あの」) をもっている。三番目は一、二番目の構造の別形で、相関辞の位置に関係代名詞がくるパターンである。先のDで述べた ‘jis samay maim̃ bhārat jāūṅgā’ の ‘jis samay’ も斜格名詞句「時／時に」を表す場合の別形である。これを、時を表わす関係副詞 ‘jab’ を使って表すと以下のようなになる。

jab maim̃ bhārat jāūṅgā, ...
 関副 私 インド 行く—未来

英語などに見られるように、「時」「場所」「様態」などを表す場合は、この関係副詞と置き換えることが可能である。このような関係副詞も含め、ヒンディー語の関係代名詞、関係形容詞は若干細分化されており、その数は英語より少し多い⁶⁾。

ところで、先のDでも触れたが、関係代名詞節の名詞句を、分詞を使って言い換えることができる。

us dukān meṃ miṭhāiyāṃ bectā huā marad

あの 店 に お菓子 売る—未完了 コー完了 男

「あの店でお菓子を売っている男」

us dukān meṃ becī huī miṭhāiyāṃ

あの 店 に 売る—完了 コー完了 お菓子

「あの店で売っているお菓子」

*miṭhāiyāṃ bectī huī dukān

お菓子 売る—未完了 コー完了 店

「お菓子を売っている店」

一番目の名詞句では、主語がヘッド名詞になっており、二番目の名詞句は目的語がヘッド名詞になっている。三番目の非文法的な名詞句は、お菓子が売られている場所、すなわち斜格名詞句が対象になっているものである。ヒンディー語では、この構造は主語と目的語に限り、未完了分詞、完了分詞を形容詞的に使用し、直接ヘッドの名詞を修飾させることができる。一方の日本語の、同じ機能をもつ動詞の連体形は、実際、文法関係もしくは文法機能の制限はない。主語であろうが目的語であろうが、またオプションとしての斜格名詞句であろうが直接ヘッド名詞を修飾することができる。「店」といえば、表層的にはいかにも直格名詞（つまり主語か目的語）のように見えるが、ヒンディー語のそれは、関係詞節内で文法関係として欠落しているのが斜格名詞であること、そしてそれが位置格として機能していたことを情報として保持したままであるからである。

したがって、ヒンディー語で「お菓子を売っている店」のように場所を先行詞にする場合は、Dの分詞を使って表すことができなくなり、以下のとおり、関係副詞 'jahāṃ'⁷⁾を使用した関係詞節で後置修飾させるしかなくなる。

(vah) dukān jahāṃ miṭhāiyāṃ becī jāṭī haim

あの 店 関係副 お菓子 売る—完了 行く—未完了 コー現在

「お菓子を売っている店」

このように、関係詞節による後置修飾、および分詞による前置修飾の両方を持ち合わせている理由には、ヘッド名詞が定形節内での文法関係もしくは文法機能をそのまま保持している点で、日本語のように一律に前置修飾に依存することができず、制約がかかることが大きな要因になっていると言えよう。

H. 同格詞節

先の関係詞節同様、同格詞節（同格接続詞 ‘ki’ を使用）も名詞を後方から修飾する構造をとる。関係詞節の時は相関辞 ‘vah’ があったが、この同格詞節も、相関辞 ‘yah’ をもつ。本来、前者は遠称詞（日本語でいうところの「あれ／あの、それ／その」）、後者は近称詞（「これ／この、それ／その」）として使用される。

(yah) khabar ki merā dost kal yahāñ āegā
 この 知らせ 同接 私の 友達 明日 ここ 来る—未来
 (yah) sandesā ki vah kal yahāñ āegā
 この 知らせ 同接 彼 明日 ここに 来る—未来

同格詞節は関係詞節のように文の要素がどこか欠落したものではなく、きちんとした文が名詞を修飾する。いってみれば、英語の ‘the truth that’ の後に完全な文がくるのと同じ構造である。呼応させる相関辞 ‘yah’ は省略されることもある。

この名詞句は次章で挙げる (5) 動詞的名詞（不定詞）＋ 属格後置詞 ＋ 名詞のパターンで表すことができる。詳しくはまた (5) を参照されたい。

3. 属格後置詞を伴う名詞句の構造と分析

では、ヒンディー語の名詞句パターン全体を概観したところで、属格後置詞 ‘kā’ を使った名詞句を取り上げ、詳しく観察しよう。属格後置詞 ‘kā’（男性・単数形）、もしくはその異形である ‘ke’（男性・複数形）‘ki’（女性・単数形兼複数形）は、便宜上、日本語の「の」に置き換える。また、ヘッドとなる名詞にはいくつか種類がある。以下では普通名詞、動詞派生名詞の二つに大きく分けてみていきたい。

(1) 名詞＋属格後置詞／属格代名詞 ＋ 普通名詞

このパターンに該当する例は枚挙に暇がないが、いくつか一般的と考えられるものをざっと挙げてみよう。

āp ki gārī : あなたの車
 merī beṭī : 私の娘（属格代名詞＋名詞）
 dṛtarāṣṭra kā moh : ドリタラーシュトラの執着
 tumhārā kām : 君の仕事（属格代名詞＋名詞）
 reśmī kī sārī : 絹のサリー

「あなたの車」および「私の娘」は、ともに所有もしくは所属を表す。三つ目の「ドリタラーシュトラの執着」も、「ドリタラーシュトラがもつ執着」というある種の所有を表すと言えよう。四つ目の「君の仕事」は「君が負っている仕事」や「君がする仕事」やいろいろ解釈できるが、「君」に何らかの形で属しているのは間違いない。「絹のサーリー」は、「できた／作られた」という材料を表すものである。これらはおおよそ日本語の格助詞「の」と同じ意味を表すものといえる。

もう一つ、ヘッド名詞が斜格になった斜格名詞句も挙げておこう。

kuch dinom̐ (ke) bād : 数日 (の) 後

これは日本語の「～の後(に)」と同じで、「時」のような形式名詞つまり斜格名詞になり、その斜格名詞句全体が文中で副詞的に使われるパターンである。省略できる属格後置詞 'ke' (男性・複数形) は、日本語で「数日後」という具合に、半ば一語句のように扱われたものである。ただ、これはたまたまこの 'bād' 「後」の時に省略が可能なだけである。日本語にも「～の前(に)」「～する矢先(に)」などいろいろあるが、ヒンディー語にもこの種の斜格名詞句は、(日本語ほどではないにしても) たくさん見られる。

ところで、先の「私の娘」に見られるように所有もしくは所属を表す名詞句にコピュラ動詞を付けると、存在と所有の間のもを表す表現になる。

hamārī do beṭiyāñ haiṃ.

私たちの 2 娘 コー現在

「私たちには娘が二人いる。」

文字通りは「私の二人の娘がいる。」という存在文だが、同時にある種の所有もしくは帰属を表す文でもある。日本語らしく言い直せば「AにはBがいる」とするのが最も妥当な表現である。もう一つ「いる」の代わりに「ある」となる文もある。以下がそれである。

rāvāṇ ke das sir haiṃ.

ラーヴァナ の 10 頭 コー現在

「ラーヴァナには10の頭がある。」

これも、「ラーヴァナは10の頭を持っている」というある種の所有の意味をもった「AにはBがある」という存在文である。どちらもいわゆる存在文とほぼ同じように見えるが、ヒンディー語のこの名詞句文が成立するのは、人という主体に属する肉親の存在、または身体とい

う主体に属する身体の一部という場合のみである。どちらも主体への帰属度が高いため、属格後置詞を用いたこのパターンが使用されるものと考えられる。ちなみに、上で挙げた「あなたの車」のようないわゆる一般のモノが対象となるの所有表現は、‘A ke pās B’「Aの傍にBがある」(Aには通常「人」、Bには「もの」が代入される) = 「A (の) ところにBがある」を用いるのがヒンディー語では一般的である。

(2) 名詞+属格後置詞/属格代名詞 + 動詞派生名詞

ここではヘッド名詞が動詞派生のものを観察する。まず、自動詞派生の名詞について見てみよう。

pāṇḍavom kā āgaman : パーンダヴたちの来訪

prahlād kā janm : プラハラダの誕生

us kā ronā : 彼の泣くの

「来訪」「誕生」はともに「来る」「生まれる」と関連しており、修飾部の名詞句には主語がくる。したがってこの属格後置詞‘kā’は、主語をつなぐもの、すなわち、主格の文法機能をもっていることになる。三つ目の例はヘッドが動詞の名詞、すなわち不定詞になっているものである。文字通りは「彼の泣くこと」となり、属格後置詞‘kā’はやはり主語を表す。これらは、つまり日本語の「友人の来訪/友人が来ること」がという具合に「が」から「の」へ転換するのに等しいものといえよう。

では、他動詞派生名詞の場合はどうだろうか。

ājñā kā pālan : 命令の維持

māñ kī pratikṣā : 母の待つこと

devtāom kī rakṣā : 神々の保護

kaṃs kā vadh : カンサの退治

便宜上、属格後置詞‘kā’に日本語の格助詞「の」を当てているので、日本語としてはおかしい感じを受けるが、この属格後置詞‘kā’は、他動詞派生名詞の他動詞「維持する」「待つ」「保護する」の対象、すなわち目的語を補完するものとして機能する。特に、‘rakṣā’「保護」については、日本語のように「の」を使うといかにも主語の「が」の機能をもっているかのように見える。一番下の名詞句も、日本語でヘッド名詞の‘vadh’を本来の意味の「殺し⁸⁾」とすると、まるでカンサが誰かを殺すように受け取られる。つまり、日本語の「殺し」がヘッドになると、「の」が「が」を指しているかのように見えるのである。しかし、これも実際は

「を」である。

また、ここで動詞派生名詞がヘッドであるこの統語構造に関連して以下の慣用化した斜格名詞句も挙げておこう。

us ke saḥāre : 「それにもたれて」
 それ の ・ 斜 動詞派生名詞 ・ 斜

このヘッド名詞は原形が ‘saḥāra’ で、日本語で言えば「支持／支え」になる。上で述べた形式名詞の時と同様、このような斜格名詞句を使ったいわゆる副詞的な表現の例も枚挙に暇がないので、一例を挙げるにとどめる。

(3) 名詞＋属格後置詞／属格代名詞 + 斜格名詞句 + 動詞派生名詞

ここでは、先の(2)で観察した主語、目的語(主格、対格)以外の文要素、すなわち斜格名詞句を、動詞派生名詞がヘッドである名詞句に挿入するものである。

aṅgrezom kā bhārat par rājya : 「英国のインドへの統治」
 英国 の インド 上に 統治
 merā us se sambandh : 「私の彼との関係」
 私の 彼 と 関係

上の例は、‘rājya’ 「統治」が動詞派生名詞になっているが、属格後置詞を含む修飾部は、主格の機能を併せもっている。そして、その場合、統治の対象 ‘bhārat’ 「インド」は ‘bhārat par’ 「インドの上(に)」という斜格名詞句となる。そして、これは、通常、属格後置詞の修飾部とヘッド名詞の間に置かれる。下の例の「私の彼との関係」(文字通りは「私の彼と関係」という名詞句の場合も、「彼と」に相当する ‘us se’ の部分が、同じく修飾部とヘッド名詞の間に置かれる。むろん、日本語の「彼と私の関係」のように ‘us se’ の部分を名詞句の前に置くこともできるが、前章のFの斜格名詞句＋名詞のところでも述べたように、英語などの前置詞句とは違って、本来、属格後置詞以外の後置詞を使った斜格名詞句にはヘッド名詞を直接修飾する機能はないので、名詞句のまとまりを明らかにするためにも属格後置詞の修飾部とヘッド名詞の間に置くのが普通となっている。

このように、ヒンディー語の属格後置詞 ‘kā’ は主語、目的語(主格、対格)を深層に保つことができ、与格後置詞 ‘ko’ 以外の後置詞(たとえば ‘par’ 「(上)に」、‘se’ 「から／へ／～に対して」、‘mem’ 「(中)に」)による斜格名詞句は、挿入可能な位置、つまり属格後置詞の修飾部とヘッド名詞の間にそのまま置かれる。

(4) 斜格名詞句 + 属格後置詞 + 名詞

ヒンディー語にも、前節で触れた斜格名詞句による直接修飾ではなく、いわば日本語の斜格名詞句である「へ／と」＋「の」のような、属格後置詞の修飾部側の名詞に斜格名詞句を埋め込むパターンが見られる。以下の ‘par’ 「(上) に」を使った例がそれである。

mez par kī pustak
机 上 に の 本

この ‘par’ 以外で属格後置詞 ‘kā’ の修飾部として埋め込まれるものはないようだが、この「机の(上)に」の部分は「机の上」の「上」のような、あたかも形式名詞のように振舞っているものと考えられる。実際、「～の中から」という時も ‘~ mem se’ と後置詞が連なっているようになる。これも ‘mem’ 「(中) に」が、「中」という形式名詞のような働きをしているものと考えれば、理に適う。

ちなみに、‘se’ 「から」を使った斜格名詞句は、この構造を取るには無理がある。

*dilli se kī ciṭṭhī
デリー から の 手紙

日本語ならば「デリーから来た手紙」という意味で「デリーからの手紙」と普通に言えるが、ヒンディー語の場合は、「デリーから来た手紙」を2章のDで挙げた分詞か、もしくはGの関係代名詞かで表現する方が自然である。

(5) 動詞的名詞(不定詞) + 属格後置詞 + 名詞

ここで挙げる例は、修飾部に動詞的名詞、いわゆる不定詞がくるものである。直格の不定詞語尾 ‘-nā’ は、属格後置詞の影響で、常に斜格形の ‘-ne’ に変化する。

pīne kā pānī : 飲み水
飲む・斜 の 水
sone kā samay : 寝る時間
寝る・斜 の 時間

文字どおりは、「飲むことの水」「寝ることの時間」となっている。日本語なら連用形「飲み」を使って一語化させた「飲み水」、また、生産的なものとして連体形「寝る」を以ってヘッド名詞を修飾させる「寝る時間」のパターンがある。ヒンディー語の不定詞には形容詞的

に名詞を直接修飾する機能がない。したがって、名詞を修飾する場合は属格後置詞を必要とする。

また、上の「寝る時間」が以下のように斜格名詞句になると、「～する時(に)」という意味になる。

sone ke samay : 寝る時(に)
寝る の 時間

この形式名詞化した斜格名詞 ‘samay’⁹⁾ は、まさに日本語の「時(に)」と同じだが、以下のとおり、2章のGで挙げた関係詞節の方が依然として使用される。(主語には3人称・単数を補う。)

jab vah soegā, ... : 寝る時(に)
関副 彼 寝る—未来

特に意味的に厳密な使い分けがあるわけではないが、あくまで定形節であるこの関係詞節は、動詞が時制を負った定形になる必要がある。一方の非定形節の「時」は、不定詞の斜格形のみでよい。また、ヒンディー語のこの「時(に)」の表現には、前章のDで挙げた「インドに行く時」のように ‘sote samay’ という、日本語の連体形のごとく、文法関係を無視して未完了分詞が直接この ‘samay’ を修飾するものがある。本来、ヘッドの名詞は分詞である動詞の主語もしくは目的語でなければならないのだが、これはその例外となっている珍しいパターンである¹⁰⁾。

また、前章のH. 同格節のところ述べてものの、不定詞を使った例は以下のとおりである。

mere dost ke kal yahāñ āne kī khabar
私の 友達 の 明日 ここ 来る—不定・斜 の 知らせ

この場合、文の主語は、属格後置詞 ‘kā’ もしくはそれを内包した属格所有代名詞で表される。

(6) 独立属格

最後に独立属格¹¹⁾ について見てみよう。これは、先行する名詞もしくは「もの」「こと」「人」などの名詞が省略されるものである。日本語のいわば準体助詞の「の」に相当する。こ

の場合、名詞句が文に絡んでくる。以下の例はこれまでの名詞句ではなく、全て文で挙げる。

yah āp kā hai.
 これ あなた の コー現在
 「これはあなたのです。」

上の例は、主語である「これ」を受けて「あなたの+もの」の「もの」が省略されている。その根拠として、属格後置詞 'kā' は 'yah' (男性・単数形) に一致している。

次の文の独立属格を見れば、さらにその省略がさらにはっきり分かる。

tumhārī umr kitne sāl kī hai?
 君の 年齢 いくつの 年 の コー現在
 「君の年齢はいくつだ。」

この文で先行する名詞は「年齢」であり、この名詞は女性・単数なので、属格後置詞 'kā' も女性形の 'kī' に変わることになる。そのため、主語がどれであるかはっきり分かる。

また、以下の文の独立属格は、'āp' (男性・複数形) を受けて「人」(丁寧形の「方」も含め)を受けている。

mere adhyapak dillī ke haiṃ.
 私の 先生 デリーの コー現在
 「私の先生はデリーの方です。」

これは、ヒンディー語で出身を尋ねる時の言い方の一つとしてよく使われる。属格後置詞 'kā' が 'ke' の男性・複数形になるのは、'mere adhyāpak' が名詞の複数形になっているからである。そして、このような名詞、および人称代名詞の複数形が、ヒンディー語では(一人称、二人称、三人称に関わらず)一人の人に対しての尊敬形として使用される¹²⁾。ちなみに、斜格名詞句を述語名詞に使用するパターンもある¹³⁾。

最後にもう一つ例を見てみよう。

haṃs to acche vicāroṃ kā thā.
 白鳥 小詞 良い 考え の コー過去
 「白鳥は良い考えのもの(=立派な考え方をしている)でした。」

この例も、これまでのと同じく準体助詞の「の」のパターンで、「白鳥」という先行名詞が省略されている。これを直訳すれば「良い考えの」となる。「彼は良い考えのでした。」というような言い方は普通に使われる。いってみれば、日本語のいわゆる「な」形容詞のように、名詞に「な」を付けて形容詞化する¹⁴⁾ものに等しいといえよう。

4. 属格後置詞 'kā' の担う文法機能

これまでさまざまなヒンディー語の名詞句、特に属格後置詞 'kā' についての名詞句を詳細に見てきたが、ここで改めてどのような特徴があったかをまとめてみたい。

まず、属格後置詞 'kā' には、日本語の格助詞「の」のようにある種の属性を表すものが見られた。主に所有、所属（もしくは帰属）、また材料を表すものである。特に、人という主体に密接に関わる肉親の存在や体に属する身体の一部のような場合には、必ず属格が使用される。この身体というのは、何も人間に限ったものではなく、以下のとおり、生き物全般に使われる。

- (1) vah kīrā jis ke adhik pair haiṃ, us ko gojar kahte haiṃ.

相関辞 虫 関代・斜 の 多い 足 コー現在それをムカデ言うー未完了 コー現在
「脚がたくさんあるその虫は、ムカデと言います。」

また、2章の定形節であるG. 関係詞節が非定形のD. 分詞で言い換えられるように、やはり定形節であるH. 同格詞節も、非定形の(5)不定詞パターンを使って言い換えることができる。しかしながら、全体として後置修飾型の関係詞節や同格節の方が好まれる。特に、文が長くなればなるほど、後置修飾型の定形節が使用される傾向にある。

この他にも重要な特徴として、属格後置詞 'kā' が二重の文法機能をもつものが観察された。前章の(2)および(5)の名詞句の中の属格後置詞 'kā' がそれに当たる。これらは二重の文法機能、すなわち、属格の深層に主格、対格の文法機能を保つことのできるものである。もう一度改めて見てみよう。

jarāsaṃdh kā ākramaṇ : ジャラーサンダの攻撃

merā viśvās : 私の信用

上の例に見られるように、動詞派生名詞 'ākramaṇ' 「攻撃」がきているこの例では、'kā' は主語、つまり主格の働きをしている。日本語の「攻撃」はそもそも「を」格を取るので、「ジャラーサンダの攻撃」といえば「が」格か「を」格が深層の文法機能として候補に上がった

てくるところだが、ヒンディー語では、攻撃対象が後置詞 ‘par’ を使った斜格名詞句で表わされるので、対格の目的語を代用する必要がないため、ここは主格で理解される。もう一つの「私の信用」の方は、この部分だけを見れば主語（主格）でも目的語（対格）でもどちらでも取れる。もちろん、現われる環境によって、主語（主格）か目的語（対格）かの判断は可能である。たとえば、後続の述語動詞に ‘karnā’ 「する」がきていれば以下のように対格となる。

- (2) vah merā viśvās kartā hai.
 彼 私の 信用 する—未完了 コー現在
 「あの人は私のことを信用している。」

(2) の「私の信用」の「の」は、日本語ならいかにも主語のように捉えられそうだが、ヒンディー語のそれは対格として働いている。いってみれば、日本語の「数学の勉強をする」によく似た形で「私の信用」を「する」という具合になっているのである。他動詞出自で ‘karnā’ 「する」を述語動詞とするパターンには、比較的属格後置詞 ‘kā’ が対格で働いているものが多い。

一方、‘honā’ 「なる／ある」が現われると、主語になる。

- (3) yah merā viśvās hai.
 それ 私の 信心 コー現在
 「僕はそう信じている。」

(3) は、属性の中の所有から出ているものといえるが、次の例文のように、前章の (3) 名詞＋属格後置詞／属格代名詞＋斜格名詞句＋動詞派生名詞で挙げた名詞句構造が、そのまま存在文の中で使われると、属格後置詞の部分が一段と主語、すなわち主格として働いていることが分かる。

- (4) merā mā par pūrā viśvās hai.
 私の 母 上に 完全な 信用 コー現在
 「私は全面的に母なるドゥルガーを信じています。」

これは、文字通りは「私のドゥルガーへの信心（信用）がある。」となる。いわば文のような名詞句がそのまま主語となっている存在文である。しかし、本来の存在文は以下のとおりである。人が事実上の主語になるこの存在文は、特に与格構文と呼ばれる。

(5) mujhe mā par pūrā viśvās hai.

私に 母 上に 完全な 信用 コー現在

「私は全面的に母なるドゥルガーを信じています。」

基本的には (5) の与格構文の方が (4) よりも普通のようなものである¹⁵⁾。しかし、(1) の名詞＋属格後置詞／属格代名詞＋普通名詞でも挙げたように「私には娘が二人いる。」という文のような、人という主体に属する肉親の存在や身体という主体に属する身体の一部という場合の存在文でこのような名詞句文が可能であったことを考えると、帰属度、もしくは所有を表す属格とそれが主格を深層で保持することが絡み合っていてできている文ともいえよう。ちなみに、以下の (6) のように、(5) の中の「母の上に」の斜格名詞句を、ここで取り上げている属格名詞句にすると、あるネイティブのインフォーマントによれば、少し不自然に感じられるようである。

(6) ? mujhe mā kā pūrā viśvās hai.

私に 母 の 完全な 信用 コー現在

「私は全面的に母なるドゥルガーを信じています。」

今度は、ヘッド名詞が ‘viśvās’ 「信用」から ‘iṃtazār’ 「待つこと」に変わったものを見てみよう。

(7) vah merā iṃtazār kar rahā hai.

彼 私の 待つこと する一語幹 続く一完了 コー現在

「あいつは俺を待っている。」

(7) の述部は、ヒンディー語の進行形の言い方である。語幹には任意の動詞が入る。これを以下の与格構文にすると、先の ‘viśvās’ 「信用」とは違って、(7) の ‘karnā’ 「する」を使った場合と同じように属格後置詞が対格を深層にもつことになる。

(8) mujhe tumhārā iṃtazār hai.

私に 君の 待つこと コー現在

「私はあなたを待っている。」

(8) は (6) と同じ構造であるが、そこではこのパターンは不自然だった。しかし、これは普通に使用される。これはヘッド名詞が動詞派生名詞の「待つこと」に起因していると考えら

れる。なぜなら、この場合、属格で表されている目的語の部分を、他の後置詞を伴った斜格名詞句に変えられないからである。したがって、必然的に属格後置詞使わざるを得なくなるのである。

もう少し、他の例も見てみよう。以下で挙げる例には、どちらも日本語なら与格もしくは方向格を取る類の動詞に関連したヘッド名詞が使用されている。

apmān kā badlā : 侮辱の仕返し

ḍṛtarāṣṭra kī nindā : ドリタラーシュトラ (へ) の非難

上の例で「侮辱の仕返し」と日本語で言えばまだ理解可能だが、実際、何を代替している「の」なのか分かりにくい。「侮辱への仕返し」のように「へ」を挿入するか、もしくは「の」を使わず複合後置詞句の「～に対する」を補うと日本語としてははっきりする。下の例もまた 'nīṃdā' 「非難」という動詞派生名詞を使ったものである。日本語の「非難」は、対格の「を」もしくは方向格である「へ」か「～に対する」を取る。一方のヒンディー語は対格である。上の例と同じく、ヒンディー語の属格後置詞もしくは属格代名詞が、深層で対格を温存している例である。ただし、この「私の非難」の部分は、文脈によっては「私がする非難」＝「私の非難」にもなり得る。

このように、他動詞派生のヘッド名詞の場合、属格後置詞 'kā' (属格代名詞を含む) の修飾部が負う文法機能は、基本的に対格であることが多い。

ところで、二重の文法機能を兼ね備えることができるために文が曖昧になることは、日本語にも見られる。

子供の作り方：子供が作る方法、子供を作る方法

父の好きなおとこ：父が好きなおとこ、父の中の好きなおとこ

[朝日新聞夕刊：1998. 8. 21]

これもまた、表層の属格後置詞がそれぞれ深層に別の格を温存しているために起こる。上の例は、テレビでいっていた「子供の(おもちゃの)作り方」を後者と勘違いした母親の話である。これは、これまで見てきたような、深層の文法機能が主格もしくは対格のどちらかで理解できる例だが、たまたま目的語となる「おもちゃの」部分が省略されたため曖昧になってしまっている。下の例は、「お父さんの好きなおとこを絵の下に書いて」といわれ「競馬場」と書いた子の話だが、日本語の「の」が深層の文法機能は、主格もしくは斜格名詞句の位置格で捉えられた例である。日本語の「の」は主格、対格のみならず、位置格まで覆うことができるのである。他の与格、方向格などは、たとえば「娘へのプレゼント」「デリーへの道」のよう

に、必ず格助詞（この例は、与格および方向格、共に「へ」）を伴った斜格名詞句をそのまま埋め込まなければならない¹⁶⁾。

一方のヒンディー語は、日本語の方向格「へ」による「への」、奪格「から」による「からの」、そして位置格の一種である「で」による「での」などの斜格名詞句の埋め込みはできない。

では、先の主格、対格に続いて、今度はヒンディー語の属格後置詞が、位置格を深層に温存することが可能かどうかを、独立属格を例に議論してみよう。

- (9) ve dilli ke haiṃ
 彼ら デリー の コー現在
 「彼らはデリーの人だ。」

(9) は「彼らはデリーの人」となるが、ただ「デリーにいる」という存在を述べるだけであれば、以下の (10) ように位置格の後置詞 ‘mem’ が出現する。

- (10) ve dilli mem haiṃ
 彼ら デリー に コー現在
 「彼らはデリーだ。」

- (11)? ve dilli haiṃ
 彼ら デリー コー現在
 「彼らはデリーだ。」

ヒンディー語で (11) のようにいうと、「彼らがデリーにいる」という意味ではなく、「彼ら」がすなわち「デリー」になってしまい、文法的にはありえても、実際の意味を成すものではなくってしまう。

一方の日本語は、「お父さんは会社のだ。」「お父さんは会社にだ。」というように格助詞「の」や「に」を付けて文にすることはできない。この場合、「お父さんは会社だ。」となる。ただし、これは「会社にいるお父さん」であり、この場合は名詞句「会社のお父さん」と言うことができる。これは、先の日本語の「競馬場」の例のところで見られたように、格助詞「の」が所在、すなわち位置格「に」¹⁷⁾を表すことができるからである。

ところが、ヒンディー語で同じように名詞句で言い換えると、以下のようになる。

dilli ke log : デリーの人々
 デリー の 人々

この場合の属格後置詞 'kā' は、デリーに今存在しているという位置格ではなく、デリーに「一時的にいる」という意味ではなく、何らかの形で属している人ということになる。

全体をまとめると、属格後置詞 'kā' には、日本語の格助詞「の」と同じように属性（所有、所属または帰属、材料）を示すもの、そして表層の属格の深層に別の文法機能を温存し、名詞句の中で主語または目的語の役割を負わせることができる、二重機能性を備えたものがあると言える。前者については、ヒンディー語には、同格の「の」の機能はなく、同格の名詞と名詞を並列させる。これは大きな違いである。また、後者も日本語の「の」にも見られる二重機能性だが、日本語は主語、目的語、そして斜格名詞句の位置格の二重機能を負わせることができる。しかし、ヒンディー語の方は位置格にまでは至っていない。

また、その二重機能性を使用し、文の要素を含んだ名詞句が、普通に存在文の一種のような形で使用されることは、日本語には見られない。これはヒンディー語の大きな特徴と言えよう。

5. お わ り に

ヒンディー語の属格後置詞 'kā' を使用した名詞句は、確かに日本語の格助詞「の」に似た機能が多かった。特に、属格が二重機能性を担うこと、すなわち主格、対格の機能を負うことも共通だったが、ヒンディー語の場合、他動詞出自のヘッド名詞の場合、往々にして目的語（対格）で現われる。名詞句による存在文もあり、主語（主格）で現われる場合ももちろんあるが、ヒンディー語には、日本語に負けず劣らず動詞派生名詞である抽象名詞 + 'karnā' 「する」を付ける名詞複合動詞が多く、その際の抽象名詞と結ばれている属格部分は目的語すなわち対格を深層に負うものとなるのである。

同じOV言語に分類され、日本語を母語とする我々にとっては簡単といわれるヒンディー語だが、このように同じ文法要素であっても、まったく同じ機能をもっているかといえばそうではない。ヒンディー語の属格後置詞 'kā' そして日本語の格助詞「の」を対照させると、これだけの違いが出てきた。この違いを知ることが、ヒンディー語運用能力の一助になることを期している。

略語：未来時制＝未来、現在時制＝現在、過去時制＝過去、命令法＝命、仮定法＝仮、未完了分詞＝未完了、完了分詞＝完了、不定詞＝不定、不変化詞＝不変化、コピュラ動詞＝コ、斜格＝斜、接続分詞＝接

続, 同格接続詞=同接, 関係代名詞=関代, 関係副詞=関副, 相関辞=相関, 否定辞=否定, 形容詞=形 (なお, 名詞の人称・数・性は省略)

翻字: ① t/d/n/r/s はそり舌音。② c は [tʃ]。③ m (=n/n̄/n/m) は鼻音記号, ṁ は鼻母音記号。④ 子音 + h は有気子音 [C^h]。⑤ ś は摩擦音 [ʃ]。⑥ r は母音。

注

- 1) インド国内の言語事情が複雑で, ヒンディー語が国語の地位を確立できないでいることが, なかなか正書法が定まらない理由の一つと考えられる。
- 2) さしずめ, これも「国家の政策」を「国家政策」のように, 一語彙化させたようなものと考えられる。
- 3) すなわち関係代名詞の 'jo' (主語, 目的語用) で修飾できるもののみ。
- 4) このパターンについては, 後ろの G. 関係詞節のところで述べるので, そちらを参照されたい。
- 5) 次章の (4) 斜格名詞句 + 属格後置詞 + 名詞でもう少し詳しく述べる。
- 6) 時を表す 'jab' の他, 関係副詞 'jahāṁ' 「場所」 'jidhar' 「方向」, 関係形容詞 'jaisā' 「様態」, 'jitnā' 「数/量」などがある。ちなみに英語の関係副詞 'how' に当たるのは関係形容詞 'jaisā' 「様態」の斜格形 'jaise' である。
- 7) 関係代名詞を使った場合は 'mem' 「に」を付けて 'jis mem とする。
- 8) 物語の性質から, 「殺し」は「退治」にした方が適していると思われるので, ここは「退治」を使用した。
- 9) アラビア語出自の 'vaqt' 「時」もよく使用される。
- 10) 日本語に文法構造がよく似ているといわれるタミル語をはじめとするドラヴィダ諸語の影響とも言われるが, 今のところ他の形式名詞にこのパターンが採用されている様子はない。
- 11) 本稿で使用する「独立属格」(Absolute Genitive) という用語は, いわゆる「独立所有格」(Absolute Possessive) のことであり, ギリシャ語等の 'Genitive Absolute' のことではないことを先にお断りしておく。
- 12) インド・ヨーロッパの言語には 2 人称複数形をもって一人の人に対する尊敬形として使用されるのはよく見かけるが, 一人称および三人称についてはあまり見られないのではないだろうか。
- 13) 英語の 'My teacher is from Delhi.' そのものの表現が出身を表す表現に使用されるようである [Snell: 37]。

mere adhyapak dilli se haim.
私の 先生 デリー から コー現在
「私の先生はデリー出身です。」

日本語で直訳すると「私の先生はデリーからです。」という具合になるが, このように斜格名詞句を述語として使うことは, 日本語ではまずない。この例に関していうと, 実際, 上の属格後置詞を使ったものの方が, 「～の人/方」という時は多いと思われる。「来る」という動詞部分を省略してこのように斜格名詞句で言うことは少ない。英語やロマンス諸語のからの類推によるものと推察される。

- 14) たとえば, 抽象名詞「静か」に日本語版コピュラ動詞ともいえる助動詞「だ」を付けて, 「静かだ」と定形にし, それをかつ形容詞化するために「な」に変化させて「静かな」となっているようなものである。この辺のメカニズムが日本語を勉強したての外国人には分かりにくいようで, 「静かだ」を「*静かなだ」としてしまいがちがしばしば見られる。逆に日本語を母語とする場合, 「彼は良い考えのだ」と言われると分かりにくい。「彼は良い考えだ」とする方が, 表現としては若干おかしい感を受けても, 文法的にはこちらの方が妥当である。
- 15) デリー周辺では (4) の方が (5) よりも口語的な言い方ではないかという母語話者もいる。
- 16) 筆者の日本語教育の経験からいえば, たとえば英語の 'a key to success' や 'stars in the sky' ように斜格名詞句が直接ヘッドの名詞を修飾できる言語に慣れている外国人は, この日本語の「の」の使い方をよく間違える。主な原因としては, 「の」を 'of' と等価値, すなわち所有や属性を表すもの

と捉えていることと、主格、対格のみならず位置格までも「の」のみで覆うことができることをなかなか理解できないことが考えられる。また逆に、斜格名詞句による直接修飾に慣れているせいで、「オーストラリアからの留学生」のように「の」が必要なものを「オーストラリアから留学生」と作文してしまうことが多々ある。

- 17) もう一つの位置格「で」は、「学校での会話」のように「での」となるので、斜格名詞句の埋め込み型だが、「に」は「にの」とはならず、「の」となる。この位置格の「に」は与格の「に」と同じであり、与格の場合は方向格「へ」に変換し、位置格の場合は属格の「の」そのものに元の機能を負わせているものと考えられる。

引用文献

- Jagannāthan, Vi. Rā. *Prayog aur prayog*, Oxford University Press, Dillī, 1981.
 新村 出 編 『広辞苑第四版』, 岩波書店, 1993.
 Snell, Rupert *Beginner's Hindi* (Teach Yourself Languages S.), Hodder Arnold Teach Yourself, 2003.
 Vyathithrday, Śrī *Mahābhārat kī śreṣṭh kahāniyāṁ*. Sunil Sāhity Sadan, Dillī, 1998.
 Vyathithrday, Śrī *Śrīmadbhāgavat kī śreṣṭh kahāniyāṁ*. Sunil Sāhity Sadan, Dillī, 1998.
 Vyathithrday, Śrī *Hitopades kī śreṣṭh kahāniyāṁ*. Sunil Sāhity Sadan, Dillī, 2000.

参考文献

- Dahl, Östen *Tense and Aspect Systems*. Basil Blackwell, UK, 1985.
 Dik, Simon C. *Functional Grammar*. North-Holland Publishing Company, Amsterdam, 1978.
 Guru, Kamtāprasād *Hīṁdī vyākaraṇ*. Nāgarīpracārīṇī Sabhā, Vārāṇasi, c1978.
 Hopper, Paul J. & Traugott, E. C. *Grammaticalization*. Cambridge University Press, Cambridge, 1993.
 石綿 敏雄 『現代言語理論と格』 ひつじ書房, 1999。
 Jagannāthan, Vi. Rā. *Prayog aur prayog*, Oxford University Press, Dillī, 1981.
 Kellogg, S.H. *Grammar of the Hindi Language*. Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd. Second Edition, reprinted 1990, 1893.
 古賀 勝郎 『基礎ヒンディー語』 大学書林, 1986。
 近藤 達夫 「いわゆる名詞句の多重層構造について」『現代言語学の射程』 英宝社, 1999。
 Rastogi, Krsnagopala & Sarma, Sasi K. *Prayogatmak Hīṁdī vyakarana*, Pitambara Book Depot, India, 1976.
 Srivastava, Ravindranatha *Hīṁdī prayoga*, Sarada Bhasina, India, 1960.
 Varmā, Dhīrendra. *Hīṁdī bhāṣā kā ithās*, Hīṁdustānī Ekeḍemī, Prayāg, 1933.

On the Noun Phrases with genitive postposition 'kā' in Hindi

Miki NISHIOKA

Abstract

The aim of this paper is to investigate the functions of genitive postposition 'kā' in Hindi, contrasting it with genitive case particle or case marker 'no' in Japanese. Although we tend to take the genitive postposition 'kā' as the equivalent of the Japanese genitive case marker, in fact, there is a notable difference between them on some usages. However, there is a common property between them, which is clarified in this paper.

We hope that this paper will help Japanese who learn Hindi language to understand the syntactic and logical usages of this case marker and to develop language performance.

The table of contents of the paper is below:

1. Introduction
2. Types of Noun Structure in Hindi Language
 - A. Noun + Noun
 - B. Noun+ 'kā'/Genitive Pronoun + Noun
 - C. Adjective + Noun
 - D. Participle + Noun
 - E. Noun + 'vālā' + Noun
 - F. Oblique Noun Phrase + Noun
 - G. Relative Clause
 - H. Appositional Clause
3. Analysis of Noun Phrase Structure with Genitive Postposition 'kā'
 - (1) Noun+ 'kā'/Genitive Pronoun + Common Noun
 - (2) Noun+ 'kā'/Genitive Pronoun + Verbal Noun
 - (3) Noun+ 'kā'/Genitive Pronoun + Oblique Noun Phrase + Verbal Noun
 - (4) Oblique Noun Phrase+ 'kā' + Noun
 - (5) Verbal Noun (Infinitive) + 'kā' + Noun
 - (6) Absolute Genitive
4. Functions of Genitive Postposition 'kā'
5. Conclusion

Keywords: Hindi, Noun Phrase, Genitive Postposition, Double Functionality, kā